中国衛生防疫メカニズムの近代的発展と性格

余 新忠（南開大学歴史学院）

翻訳：陳 璐

近代以前の中国社会は自らの衛生措置と衛生観念を持っていました。長い歴史の発展を通じて、かなり豊富な衛生防疫の措置と経験も蓄積してきましたが、近代的な意味での衛生観念、また公的権力によって介入された近代衛生防疫メカニズムは言うまでもなく西洋からの舶来品です。19 世紀後半以後、「亡国滅種」の危機に直面し、窮迫した状況の中で、「不衛生」「東亜病夫」などの国際イメージに対する恥辱の中で、そして「強国保種」の悲哀の中で、中国社会のエリートたちは身体と衛生の問題に注目し始め、近代的衛生観念と公共衛生制度の提唱と推進という曲がりくねった困難な歴史の旅を歩み始めました。今に至っても、近代化を強く求めている発展途上国である中国にとって、主に西洋から輸入された近代公衆衛生制度を全面的に確立することは依然として取り組み中の課題であり、まだ十分には実現されていない事業ではありますが、伝統的社会から近代社会に至る過程で、中国衛生防疫は確かに顕著な変化を遂げてきました。

まず、近代以後、西洋文明などの多くの要素に影響を受けてきた中国社会では、国家主導的で、国家強盛に立脚した近代公共衛生メカニズムが次第に構築されてきました。19 世紀後半からの西洋化の深化に伴い、西洋的な近代公共衛生観念とメカニズムは次第に科学と文明のシンボルと見做され、また時としてコレラやペスト、天然痘などの急性伝染病の流行という直接的な刺激を受けるによって導入され、確立されるようになりました。中国は民衆の健康を管理する公的なメカニズムが不足している状況を変え、中央と地方に医療衛生事務を司る衛生行政部門と専門的防疫研究機構を設立しました。日本などの国々に学び、公共衛生規定を設立し、消毒による清潔、検疫による隔離、人工免疫、疾病の統計、流行病調査、さらに防疫管理システムの構築などを主な内容とする衛生防疫措置を展開し、民衆の衛生習慣と意識を高め、環境衛生を主眼とする民衆衛生運動を展開しました。

この過程で、元来は個人に属していた衛生問題が民族の興亡に関わる国家の問題に変わり始めました。近代公共衛生機構の構築によって、国家はもともと民間的、非系統的で非制度的であった衛生防疫観念と対策を、公的、制度的な体系に組み入れることに成功し、民衆の身体や日常生活を国家化することによって、国家機能を具体化し、権力を拡大することを実現しました。衛生防疫の直接的な目標は個人または民衆の健康を維持することにありますが、長い間、公共衛生事業の構築は明らかに「強国保種」と国家富強を指しており、衛生防疫における個人の権利と公平正義の問題にはあまり注目されてきませんでした。また、衛生防疫措置を推進する要因は、常に社会、政治などの要素と関係しています。多くの場合、公共衛生に関連する事件の発生には、社会的思潮と世論の影響を受けている状況の中で、支配者が支配行為をよりよく維持すること、また自らの支配を正当化することに原因があります。

次に、伝統的な社会から近代へと時代が進むにつれて、社会の衛生防疫観念はネガティブからポジティブへと変わっていきました。伝統的な中国社会において、疫病は「鬼神が疫病を操る」という考え方と「疫気が人に疫病を患わせる」という考え方の両方から認識されてきました。これらの考え方に関わっている内容は多岐に渡っていますが、基本理念に絞って言えば、内部を養い、外部を避ける、つまり基本的には精気を蓄えること以外では回避することを方針としてきました。ほとんどは消極的、内向的な個人による行為であり、政府が管理する事項にはなっていませんでした。また、疫気が迫ってきていることに気づいたとしても、人々は往々にしてそれを避けることができないので、疫病に感染することは自らの天命とみなされていたため、疫病を予防する方法は真剣に考えられてきませんでした。近代に至り、近代公共衛生観念と制度が導入されることによって、中国社会では疫病対策の重点を疫病からの回避と治療という消極的な立場から、防疫という積極的な方法に転換することができました。近代における防疫は、理念的には予防をより強調し、措置的には衛生環境を積極的に変化させることで疫病発生を予防、減少させることを主張する一方、消毒、疫病検査、強制的な人工検疫と科学的研究などの手段で疫病を抑制・克服しようとしています。

清末から二十世紀にかけて、近代衛生防疫メカニズムは複雑な歴史的文脈の中で中国に導入され、近代中国の制度と生活において重要な構成要素となっています。このメカニズムには、具体的には次のような特徴があります。

まず、近代における衛生問題が著しい近代性と外来性を持っている一方で、伝統的要素とその影響力もあることを無視すべきではありません。公的権力によって中国社会に介入してきた近代公共衛生メカニズムは近代科学技術に基づいたもので、確かに西洋の舶来品です。それは西洋文明の優位性と巨大な影響力を鮮明に示しています。しかし、単なる進歩や近代化などの概念から考えるのではなく、史料を検討すれば、公共衛生に関する観念や行為は、清末以前の中国社会にも存在していたことが分かります。ただ、その時期における公共衛生観念や行為は社会に左右されるもので、個別的・自発的な公的権力の介入によるものではありませんでした。このことは少なくとも以下の二つの面に表れています。一、近代の衛生メカニズムには伝統的な要素と蓄積があり、防疫観念においては、邪気学説と細菌理論が結合され、一部の養生観念が近代衛生概念に導入されています。これらは近代衛生における伝統的な要素を示しています。また実際に、都市の環境衛生における糞尿処理メカニズムの近代化も伝統的な方法を活用して実現されています。二、中国社会の発展は、往々にして国民たちの近代衛生メカニズムに対する異なる態度に影響を及ぼしています。例えば、中国のいくつかの中心都市では、清朝嘉道時期以後、都市の水質汚染や伝染病の流行頻度が高まったため、水源を改善することに力を入れることが求められてきました。そのため、水道水のような施設は人口の多い中心都市において比較的容易に受け入れられました。同時に、知的エリートたちが都市環境汚染の深刻化を批判するようになったため、人々の都市衛生行政に対する関心が高まり、そして受け入れられやすくなりました。これらは明らかに近代公共衛生メカニズムの発展に基礎となる考え方と推進の根拠を提供してくれました。

次に、近代公共衛生メカニズムは単に健康の維持を目的とするものではなく、階級性と種族性も持っています。つまり、近代の「衛生」は健康維持にも実際に効果を発揮していますが、この制度の導入と推進は健康のみを指標とするものではな

く、民族、財産、文化などの各方面において優位な立場にある者が、彼ら自身の利益に基づき、科学と文明の名目で、関連する措置を社会全体の利益と権力秩序の名の下で強制的に推進しています。

更に、近代的公共衛生制度の導入と推進は、都市様相の変化、衛生施設の改善、疫病感染率の引下げ、国家イメージの向上などを促進する役割も持っています。これは中上層階級の視点から見ると、確かに非常に称賛すべき進歩と言えます。しかし実施に際しては、下層の民衆たちにとっては、往々にして費用を払わなければならない割に恩恵をあまり受けないという結果になってしまうことがあります。例えば、糞尿処理などのクリーン制度の変革は、一般民衆にとっては増税を示唆するだけでなく、都市周辺の郷民が糞肥料を獲得するためのコストも増加させてしまいます。こうした都市様相の変化は、彼らにとっては特別な必要性がなく、少なくても急務ではありません。また、清潔、検疫などの制度を推進する際に、民衆の実際の利益や身体の自由を侵害することもよくあります。衛生の観点から見れば、近代化の過程における多くの「進歩」は往々にして弱者グループの利益を犠牲にして実現されています。衛生検疫のように近代化には、中国社会に主権、健康、文明と進歩をもたらしたという側面だけではなく、民衆の権利と自由が衛生と文明の名目で侵食され、奪われるという面もあります。近代化を進める過程で、国家振興など、何らかの正当な理由や目標のために一部の民衆の利益や自由を犠牲にすることは避けられないかもしれませんが、推進の過程で、一般民衆の権利と合理的な訴えを無視し、ひいては彼らの訴えを保守的で、愚かな、時代遅れのものとすることがでるでしょうか。このような犠牲をもっと考慮するべきなのではないしょうか。それに対する答えは自明で、言うまでもないと思います。

また、清朝前期においては、国家による医療衛生事務への介入が非常に少なく、制度に対する規定はほぼ欠落していました。晩清衛生行政の構築は、衛生事業を個別的、個人的で専門的な管理が不足したものから、次第に体系的、組織的で公的職権の範囲で行われるものへと転換しました。国家の医療衛生事業への介入度合いが次第に高まり、「国家の近代化」の重要な構成部分として、国家衛生行政の確立は、国家機能の深化、具体化に貢献すると同時に、国家権力の拡張にも繋がります。その必要性と正当性はありますが、これらの制度自体に含まれる権力関係を意識せず、相応の監督と制約メカニズムを構築することができなければ、政府の機能は往々にして近代化の名目で「合理的」に合法的に無限に拡張することとなり、民衆の実際のニーズを重視することが困難になります。そうすると、多くの国民に負担をかけて導入したいわゆる進歩と「近代化」の成果は、少なくとも一般庶民にとっては、「水中月」「鏡中花」のように絵に描いた餅にすぎないかもしれません。

最後に、清末以来、西洋の近代的経験を導入し、科学、文明と進歩の名目の下で、近代公共衛生制度を導入・設立することは、様々な内憂外患が際立って窮迫している歴史背景において現れました。主権危機などの外的圧力もありましたが、全体的には中国の 100 年前のエリートたちの自主的・自覚的な選択であり、近代以来、彼らが国家と国民の近代化を追求してきたことの結果です。エリートたちが、当時このような決断をした背景にはかなり復雑な原因と心理状態があったはずですが、国内外とも困窮している当時の状況において、彼らはこれを中国社会と人種貧病を救済できる万能薬と考えた一方で、その必要性と適用性をあまり深く考慮しませんでした。実際、彼らには細かく分析できる機会や時間の余裕もなく、推進を簡潔にまた容易にするために、ほとんどの場合、復雑な状況を主権の維持と文明や近

代化の追求といった簡潔な問題にするしかありませんでした。世は時が移り、余裕と豊さが比較的贅沢なものでなくなった現在、過去を回顧した時に、先人の事業とその限界を厳しく責める必要はありませんが、歴史の復雑さを顧み、今の人々がこうした複雑な歴史的文脈における中国の近代化の過程を再検討し、近代性を反省するインスピレーションと要因を探す必要があります。

近代以後、西洋近代民主政治制度の発展は「生政治」の誕生を促し、新たな支配権は従来の「人を死なせるか人を生かすかの権利」から「人を生かす、人を死なせる権力」に変わってきました。こうした新しい「生政治」は民衆の生命と健康などに対する責任を負っているため、近代公共衛生メカニズムの発生と発展を推進すると同時に、政権に生命に関与する合法的な権利を獲得させました。中国はアヘン戦争以来、国門の開放と民族危機の深刻化に伴い、外部からの刺激によって近代化の道を歩み始めました。この過程で、頻繁に現れる疫病を契機に、中国が国家主導的で国家富強に着目した近代衛生防疫メカニズムを導入・確立してきたことも中国近代化の過程の中で非常に目立つ特色となっています。これまでの研究は疫病と近代公共衛生を直接関連させて論述してきましたが、実際のところ、疫病はきっかけにすぎず、根本的な原動力は中国文明自体の強大な内生力と自強の精神、及び社会的な災害に対する一貫した関心と注目にあります。これに対して、中国疫病における伝統的な意義を簡単に無視することはできません。また、同時に、当時国内外が困窮していた歴史的背景の下で、人々は伝統的な疫病の救急治療の遺産を細かく整理し、近代衛生制度との有機的融合を考えるのに十分な余裕を持っていなかったことも考慮しなければなりません。それゆえ、設立過程においては、往々にして「強国保種」や国家富強の実現といった方面の意義を強調することが多いのに対し、衛生防疫自体が持つ個人の生命と健康を維持する権利の意義を認識できず、その結果、清末民国の衛生防疫はあまりにも強い政治的意図と色彩を持っているものになりました。

主な参考文献：

キャロル・ベネディクト（著）朱慧穎（訳）『十九世紀中国におけるペスト』中国人民大学出版、2015 年

鄧鉄涛編集『中国防疫史』広西科技出版社、2006 年

飯島渉『ペストと近代中国―衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、2000 年

範行準『中国予防医学思想史』上海華東医務生活社、1953 年

『ミシェル・フーコー講義集成＜6＞社会は防衛しなければならない』筑摩書房、2007 年

『ミシェル・フーコー講義集成＜8＞生政治の誕生』筑摩書房、2008 年

余新忠『清末江南地域における疫病と社会―医療社会史に基づく一考察』北京師範大学出版、2014 年

余新忠「真実と構築：20 世紀中国の疫病と公共衛生状況」『安徽大学学報』2015 年第 5 期

余新忠『清代の衛生防疫メカニズムとその変遷』北京師範大学出版、2006 年